

現代日本の若者文化における「キッチュ」と「主流」
—札幌市の K-POP ダンス教室を事例として—

趙 嘉迪

キーワード：「キッチュ」、若者文化、自己表現、ダンス実践、K-POP ダンス教室

要旨

本論文は、札幌市の K-POP ダンス教室におけるダンス実践および学習実践を参与観察することで、若者がいかに「キッチュ」としての K-POP ダンスを通じて、とりわけ「いま、ここを楽しむ」自己表現を実現しているのかを考察することである。また、普遍的な社会的規律が相対的に緩和される K-POP ダンス教室という場における若者の諸実践を手がかりに、個人の抵抗技術と社会的規律との関係性を明らかにすることを目的とする。

本論文は 6 章の構成からなるものである。

第 1 章の序章では、現代日本の若者が K-POP ダンス教室に通うという身体的なポピュラー文化実践に着目し、舞踊人類学やパフォーマンスの人類学、若者サブカルチャー研究などの先行研究を批判的に検討する。とりわけ、これまでの研究が十分に扱ってこなかった現代都市生活における「今、ここ」の快樂さが重んじられるパフォーマンスやダンスといった側面に注目する必要性を指摘する。そして、本研究の視座として「キッチュ」という概念を導入し、それを通してヴァナキュラーなどの既存理論をいかに組み合わせ、再構成するのかを明示する。

第 2 章では、K-POP および K-POP ダンスが日本社会に浸透していく過程を歴史的にたどる。1990 年代末以降の韓流の受容、2000 年代のドラマブーム、2010 年前後のアイドルグループの流行、さらに SNS 時代におけるダンスの拡散といった流れを整理し、日本において K-POP ダンス教室という実践の場が成立する社会的や文化的条件を明らかにする。ここでは、K-POP ダンスが単なる輸入されるものではなく、日本の若者文化や習い事と深く結びつきながら、ローカルに再編成されている点に焦点を当てる。

第 3 章では、調査地である S 教室の概要や、参加者の様子、場所のセッティング、レッスンの進行、雰囲気形成過程などを描写し、K-POP ダンス教室がどのような実践的な場

として立ち上がっているのかを明らかにする。とりわけ、踊る実践と伴う参加者たちの様子や、「気合を入れる」といった内部の慣習、講師の声かけやダンスの披露、参加者同士の関係性に注目することで、K-POP ダンスが状況に埋め込まれた実践として、どのように「キッチュ」のような性格を帯びているのかを、教室内の具体的な営みから論じる。

第4章では、S教室に通う参加者の若者たちに対するインタビューデータをもとに、彼らが実際にどのようにK-POPを受容し、K-POPダンスを経験し、それを日常生活のなかに位置づけているのかを考察する。そこでは、参加者の若者たちの語りが浮かび上がることによって、K-POPダンスが単なる趣味やダンス実践に収斂されず、むしろ若者たちの感情やアイデンティティに深く関与していることが示される。そして、「キッチュ」としてのK-POPダンスが、若者の日常生活においては、どのように意味づけられるのかを具体的に検討する。

第5章では、外国人である筆者自身がS教室に新参者として参加した経験に基づいて、オートエスノグラフィーとして記述する。具体的には、新参者としてその場に入る際のよそ者としての身体感覚、調査者であると同時に参与者であるという立場の揺らぎ、周囲との距離感から、その経験を深掘りしていく。また、「昭和時代」をテーマにしたイベントへの参加経験などを通して、それによる関係性に巻き込まれる過程を記述し、さらに、自身がどのような変容を経験したのかを分析する。

終章では、以上の分析を踏まえ、「キッチュ」としてのK-POPダンスと現代日本の若者文化の関係をあらためて、理論的に位置づける。K-POPダンス教室を主流的な社会と相互関係や相互干渉する場として捉え直し、現代日本の若者文化の一側面を描き出すとともに、本研究の限界や今後の展望を整理することで、本論文を締めくくりする。